

有栖川宮のロシア訪問と「宮廷外交」

アレクサンドル・ソコロフ

君主国家の間では、支配者間の接触、すわなち別名「宮廷外交」と呼ばれているものは、ある程度、それぞれの国家の外交諸官庁を通して行われる正式な外交交渉に代わり得る。

ロシアはこの点において最も顕著な実例を示している。その理由は、ピョートル大帝以来、国家間交渉の分野は、国家元首が格別に注目するところであったからである。この体制が完成したのはニコライ一世治世下であるが、体制の欠陥が全面的に表面化したのもその時期である。「君主間の連帯」が、オーストリア皇帝あるいはプロシア国王をして地政学上の具体的な取り分を拒否させるであろうという誤算が、一八五三年から一八五六年のクリミア戦争時、ロシアの孤立化を招いたのである。

アレクサンドル二世、アレクサンドル三世は、この苦い経験から教訓を得るが、しかしながらそのことは、時に応じて、「宮廷外交」という慣れ親しんだ制度を手段とすることを妨げはしなかった。

これに関連し認識しておく必要があることは、一九世紀後半においても専制的性格を持つロシア帝国の国家組織は、本質的に、国王あるいは皇帝が外交政策に影響を与える可能性が実質的に制限されている他のヨーロッパ諸国の立憲君主体制とは明白に異なっていたということである。

一八五〇年代から六〇年代にかけての国際舞台への日本の登場は、地政学的な計算とは無関係に、ロシア皇帝の日本に対する関心を引き起こしたが、その原因は、おそらく両国家のイデオロギーが一見類似してい

たことであつたはずである。

その後の出来事が示すように、このイデオロギー的な類似は表面的なものであつたが、一八九〇年代以前は、日本は動くべき方向性がまだ明瞭とは言えず、それはこの「日の出ずる国」の指導者たちにさえも明白なものではなかつた。

明治維新の公式スローガンは、外国の多くの観察者からすれば、王政復古を標榜したものであり、それは更に、加速する近代化と西欧化を促進すべきはずのものと受け取られた。

これに際し、一八八〇年代以前の日本の指導部は、国際舞台における全体的な勢力均衡を十分明確には把握しきれない中で、固有の外交的利益分野を策定し、想定される連携国と対立国の見定めを模索していた。

日本指導部が直面する事態の複雑さを十分正確に理解していたサンクト・ペテルブルグでは、両国間の懸案の諸問題を解決するに当たり、「宮廷外交」に期待が寄せられたのは必然であつた。しかしながらロシアでは、日本でミカドという人格に付与された特別に神聖な地位について完全に明確には認識されておらず、そのことが必然的に直接折衝の確立に困難をきたした。

周知のごとく、ロマノフ家の代表者で日本を最初に訪問したのは、一八七一年にコルベツト艦スヴェトラナ号で航海をしたアレクセイ・アレクサンドロヴィチ大公【皇帝アレクサンドル二世の四男】である。

時に、大公が陸仁天皇に拝謁したと言及がしばしば見られることがあ

るが、それらは確証のないものであり、大公自身もそれに類したことは何ら確言していない。

天皇との会見が大公の予定に実際に組まれていたことはかなりの程度の確信を持って言うことができるが、神聖なる天皇への拝謁がなかったことは大公には、侮辱とは言わないまでも明白な軽視と受け取られたのは当然であった。大公の父であるアレクサンドル二世も自尊心を傷つけられたと感じたのはいまでもなかったが、「宮廷外交」の初めての不成功を大げらにすることは当然のことながらしなかった。

その一方で、状況は急速に展開していった。すなわち、複雑な問題が山積みであるにも関わらず、一八九〇年代の半ばに至って露日関係は全体として、国際レベルを含めて順調に発展していった。

一八八四年の夏、日本からやってきた軍事視察団がペテルブルグに滞在した。使節団のメンバーは、陸軍大臣オーヤマ中将【大山巖】、ミウラ中将【三浦梧楼】、ノズ少将【野津道貫】、コニアラ秘書、通訳のオーサカ少佐【大迫尚敏】であった。

大山巖（一八四二—一九一六）は、後に元帥となり、一九〇四年から一九〇五年にかけての対ロシア戦争時には日本陸軍の司令官であった。ノズ・ミチツロ【野津道貫】（一八四〇—一九〇八）もその戦争で武威を發揮し、元帥の称号を得た。

アレクサンドル三世に対し、日本視察団一行は一八八四年七月二〇日（八月一日）正午にペテルゴフのフェルメル宮殿で拝謁をし、その後ニージニヤヤ別荘に移動し、皇后マリヤ・フョードロヴナに拝謁した後、大ペテルゴフ宮殿での午餐に招かれた。

この日本視察団について念のために指摘しなければならないことは、視察団の訪露の主たる目的が、ロシアも含め、西欧の軍事情勢の視察であったことである。そのことはそれ自体、軍人を含めた両国の関係者が

相互に関心を抱いていた、すなわちその関心は相互的なものであったことを如実に示している。

一八八七年、海軍士官として航海をしたロマノフ家のもうひとり代表者が日本を訪れた。アレクサンドル・ミハイロヴィチ大公【皇帝ニコライ一世の四男（ミハイル・ニコラエヴィチ大公）の四男】である。

大公が日本にやって来た経緯は極めて伝統的なものであった。海軍兵学校を卒業し軍務に就いた大公は巡洋艦ルインダ号で航海に出発した。海軍士官に必要な実務経験の習得と共にこの航海は教育的性格をも持ったものであった。

しかしながら、この航海の日程は通常のものとはやや異なり、明らかに、極東を知ることそのものに重点が置かれていた。のみならず、アレクサンドル・ミハイロヴィチ大公は日本に二年近くも留まり、日本から太平洋地域の他の諸国を巡る航海も組まれていた。

ほぼ三ヶ月ごとに、ルインダ号は長崎を出航し、フィリピン諸島、インド、オーストラリア、セイロン、フィジー、その他、太平洋とインド洋の島々を訪問した。

長崎での定時停泊中に、大公はアレクサンドル三世から電報を受け取った。任務は睦仁天皇を訪問するというものであった。

大公はそれについて次のような短い発言を残している。「我が国の公使は非常に心配をしていた。というのも、私が日本の天皇がこれまでに見をした中で、最初のヨーロッパ諸国代表者となるはずだからである」。

拝謁の儀式そのものについては、様子をきわめて簡単に記した後、大公が明らかに満足気に報告していることは、一週間後に晩餐会に招かれたこと、その席で日本語の知識を披露しよう⁽ⁱⁱ⁾と決意し、幾つか日本語の言葉を言ったということであった。大公の日本語を聞いた日本の皇后は

はじけるように笑った。というのも彼が口にした語句は、港地域のみに見られるきわめて特殊な方言だったからである。⁽³⁾

このエピソードだけを以ってしても、日本の皇族は間違いなく、ロマノフ家の代表に近親感を持ったはずであろう。

このように、アレクサンドル・ミハイロヴィチ大公によっては、何ら本格的な外交交渉は行われなかったと思われるにも拘わらず、自らの任務を大公は完全に成功裡に成し遂げた。接触は王室レベルでは確立され、日本の天皇家の代表者が近いうちにロシアを答礼訪問するであろうことが期待された。

この代表者となったのは有栖川宮威仁親王（一八六二—一九一三）であった。その長兄有栖川宮熾仁親王（一八三五—一八九五）は、明治期の有力な軍事・政治指導者の一人であり、当初は西欧化に反対する立場をとっていたが、後に倒幕に積極的に参加し、西郷隆盛討伐戦（一八七七）の指導者となり、日清戦争（一八九四—一八九五）時には日本陸軍の総司令官で、不敗を誇る軍事指導者であった。自身かつてアレクサンドル三世の戴冠式に列席するため一八八二年ロシアを訪問している。その弟である威仁親王自身は英国留学経験をもち、海軍軍人として活躍して兄の死後有栖川宮家を継いだ。

有栖川宮威仁親王のロシア訪問は、日本が憲法の受容を準備していた時期に当たり、一方、それに対しロシアの方は、専制体制が自己不動なものとなつていると言ってもよく、両者は相呼応するところがないように思えた。

「日出ずる国」の立憲君主体制へのイデオロギー転換の過程において、大英帝国に代表されるロシアの地政学上の恒常的敵対者との日本の戦略的接近、さらには、列強先進国として、日本の位置づけに有利なイデオロギー基盤が醸造されていた。

しかしながら一八八九年には、そのような展望は曖昧模糊とした状況にあった。

有栖川宮親王のヨーロッパ諸国歴訪は、政治的接触の確立と同時に、西欧の軍事情勢を調査するという優れて実用的な意味を持っていた。この出来事に関連して、事情に通じた観察者であったニコライ・ヤボンスキー【ニコライ堂のニコライ・カサートキンのこと。垂使徒聖ニコライは、露暦一八八九年一月三日（西暦二月二日）の日記の中で次のように記している。「白川とかいう公爵がヨーロッパへの途に就くというのとは訳がちがう。有栖川宮が夫人を同伴してロシアに出かけるのである。我が国の皇后に日本の皇后からの勲章を私的に手渡すというのがその任務である。彼はモスクワをも訪問しようとしている。宗教事情をその目で確かめるといふ秘密任務を帯びていないはずがない。もっとも、表向きにはその任務は軍事技術の調査である」⁽⁴⁾。

もちろんここには、「日出ずる国」の住民をロシア正教に帰依させるという自己の主要課題に照らして日本国内のあらゆる出来事を検討するという、キリスト教伝道者としての確たる執念がにじみ出ていることは言うまでもないが、キリスト教信仰を以後日本において普及させる目的で、「自らの目で確かめる」という意図を有栖川宮がペテルブルグにおいても持っていた可能性は排除できない。いずれにせよ、西欧の観察者たちの多くは、日本のキリスト教化を日本の近代化の必要不可欠な要素の一つと見なす傾向があった。

ロシア国立歴史文書館に保存されている有栖川宮親王の訪問に関係した史料には、彼の任務の隠された政治的意図を窺わせるものはないが、間接的な証拠から、両大国間の相互関係につながるものを浮かび上げることができる。

親王が近々来訪するとの知らせがロシア帝室内省に入ったのは一八

八九年の四月の始めであった。

ニコライ・カルロヴィチ・ギルス外務大臣（一八二〇—一八九五）は、露暦一八八九年四月七日（一九日）に帝室宮内大臣イラリオン・イヴァノヴィチ・ヴォロンツォフ・ダシコフ伯爵（一八三七—一九一六）宛に次のような書簡を送っている。

「伯爵イラリオン・イヴァノヴィチ殿

去る三月二三日付けの私の書簡第一〇九七号の補足として次のことを閣下にお伝え致します。当地駐在の日本公使から先程受け取った通知によれば、日本の有栖川宮親王が新暦四月末にパリを出発しサンクト・ペテルブルグに向かい、おそらく旧暦四月二五日までには当地に到着することです。閣下に対する私の深い尊敬と恭順の念を以て、お伝え申し上げます⁽⁵⁾。

この史料の添え書きには、露暦四月一日（二二日）にこの知らせが帝室宮内総局である主馬寮に伝えられた、とある。主馬寮というのは儀典局のことで、親王の出迎え、滞在先、文化のおよび実務的な手配の責任を担う帝室宮内省の部局である⁽⁶⁾。

ところが親王からは、訪問時期を繰り上げるといふ思いがけない知らせが入った。これについては、考えられる原因が、ギルスが露暦一八八九年四月一九日（五月一日）に皇帝官房長官ニコライ・スチエパノヴィチ・ペトロフに宛てた後統書簡の中で述べられている。そこでは、有栖川宮親王がすでに露暦四月一八日（三〇日）にパリを出発し「サンクト・ペテルブルグに直行する。有栖川宮夫人は病気のためパリに留まらざるをえなくなった」と記され、最後に「然るべきご指示をお願いしたい」とある⁽⁷⁾。これから誰の目にも明らかかなことは、経験豊かな帝室宮内省の役人であるギルスには、同省内ではまだ誰も親王の来訪に向ける準備に入っていないことがよく分かっていたということである。

日本の親王の来訪についての別の書簡をギルスは同じ日に、歓迎儀式そのものを司る帝室宮内儀典長アレクサンドル・セルゲエヴィチ・ドルゴコフ公爵（一八四一—一九一三）宛に送っている。ドルゴコフ公爵は、同様の知らせを皇帝官房長官ペトロフが受け取っていることをまだ知らなかったため、急いで同長官に賓客のことを知らせ、朝の上奏時に皇帝にその賓客について報告し、君主に「本件に関しての特別なご指示」を乞うよう要請した⁽⁸⁾。

興味深いことに、これ以後の史料の中でドルゴコフの名前は一度しか出てこず、しかもついでに触れられただけで、このことは彼が例え特に複雑さを伴わないようなものであったとしても、具体的な事案について責任を引き受けることを躊躇するような、主体性のない並の役人という評判を全体的に裏づけるものである。一方、帝室宮内省はその職務の性格上、日本を含め、外国からの使節団の受け入れに関して豊富な経験を有していた。

最後に受け入れた外国使節団が前述の大山視察団であった。従って、有栖川宮親王の来訪に向けての態勢を組織するに当たって要求されるのは、賓客の地位が以前より高いことを考慮した上で、五年前の対応に然るべき修正を加えることだけであった。

この課題をもドルゴコフを驚かせたであろうことは想像に堅くない。なぜならば、来訪するのが、単に元帥という高位な人物ではなく、天皇家と血で繋がる親王で、その訪問は「宮廷外交」の一環と見なされていたからである。

有栖川宮親王の訪問は公式的性格を帯びたものではなかったが、親王の持つ影響力から見て、その交流の中で、両国相互の懸案事項への言及と両国君主の直接接触を通してのそれら諸問題の解決の可能性が予想された。

このような想定の下では、表面的な儀式面が特別な意味を持つことになり、そのことに不安を覚えたのはドルゴロフ一人ではなかった。

すでにその翌日に別の一人の高官も不安を表明している。アレクサンドル三世の側近で皇帝専用のアニチコフ宮殿の長官であるヴァシリー・ヴァシリエヴィチ・ズィノヴィエフ（一八一四—一八九二）である。彼はペトロフに宛てた短信文書の中で次のように述べている。

「尊敬するニコライ・スチェパノヴィチ殿、私たちは皆、日本の親王をかくも早い時期に当地にお迎えすることになろうとは思っていませんでした。親王のペテルブルグ到着は四月の終わりあるいは五月の始めになるとのことでしたので、現時点では未だ何らの指示もなされておられません。

もし明日何らかのことが分れば、直ちに貴殿にお知らせ致します。今は、この機会をお借りして、貴殿に対する深い尊敬の念を表すのみです」⁽⁹⁾。

ただ、ドルゴロフとは異なり、経験豊富で権威もあるズィノヴィエフは、不安を表明するだけで留まっていなかった。同じ日にペトロフに宛てた別の短信文書の中で、英語の話せる侍従武官レイチェルン陸軍大佐に対して有栖川宮「付き」となるよう指示したことを伝えている。⁽¹⁰⁾職階を考えれば、レイチェルンに何らかの指示を与える立場にはズィノヴィエフはなかったということは示唆的で、そのことから、皇帝の直接の裁可によって決められたと結論することができる。

冬宮内のいずれの部屋を親王に割り当てるかというについても、おそらくレイチェルンのことと同時に、皇帝の同意を得て決められたものと思われる。このことを間接的に示すものとして、儀典局長ボリス・ヴラジミロヴィチ・シチュルメル（一八四八—一九一七、後にロシア帝国の最後から二人目の首相）の書附があり、そこに、有栖川宮と随員に

対してコメンダンツキー・コリドールの部屋が割り当てられたことが記されている。⁽¹¹⁾

翌日ペトロフは、部屋の割り当てとレイチェルンが任命されたことを直属の上司である帝室宮内大臣イラリオン・イヴァノヴィチ・ヴォロンツォフ・ダシコフに報告をし、⁽¹²⁾それを受けて官僚機構という巨大なはずみ車が回転し始めたのである。

その中であって外務省は、有栖川宮親王を迎える準備が所定の期日までに間に合うかどうかを明らかに心配をしていた。外務官庁の長を安心させるために露曆一八九八年四月二日（五月三日）にペトロフはギルスに、賓客に冬宮の中の部屋が割り当てられたこと、付添役（レイチェルン）が選ばれたこと、および、然るべき指示が儀典長（ドルゴロフ）に与えられたことを知らせた。⁽¹³⁾

しかしながら、宮内官僚たちは明らかに時間不足という状況の中で行動することとなった。というのも、四月二日（五月三日）の午前中に駐露日本公使ニッシ【西（徳二郎）】から帝室宮内省に、親王が同日に列車でロシアに入り、直ちに冬宮に向かい午後六時に到着するとの短信文書が送付されてきたからである。⁽¹⁴⁾

驚くべきことだが、有栖川宮を冬宮で出迎える責任者が決められたのは本当にぎりぎりの時間で、しかも、文字通りたまたまそこに居合わせ、職階から見ても適当と判断されただけの帝室宮内省の人間、アレクサンドル・ペトロヴィチ・シチュルバトフ侍従（一八三四—一九〇四以後）が責任者となったのである。シチュルバトフは有名な歴史学者⁽¹⁵⁾であるが、この時期、失寵に近い状態で、宮中に来ることは稀で、日常はI・F・パスケヴィチ元帥の本格的な伝記の執筆に取り組んでいた。彼がペトロフの近くに居合わせたのは偶然だったと思われる、午後六時までに「略礼服着用、儀典杖持参の上」親王を出迎えるために冬宮に来るようにとの

依頼が降りかかってきたのは彼にとつては思いもかけないことだったはずである。¹⁵⁾

幸いなことに、皇帝の居住する本宮殿での親王の出迎えは滞りなく行われた。唯一の懸案は、出迎え役のパスケヴィチと親王を予め用意された部屋にきちんと通すことだけだったので、特に問題はなかった。

そして同日、すなわち露暦一九八九年四月二日(五月三日)の内に、日本使節団がアレクサンドル三世に拝謁する日時に関して確認がなされた。そのことを証拠づけるのがB・V・シチュルメルが不詳の人物に宛てた草稿の書附で、その中に「皇帝・皇后両陛下は四月二三日一二時ガツチナ宮殿において日本の親王を接見する予定」と記されている。

指定された日時にガツチナ宮殿に到着するために、有栖川宮とその随員はガツチナに向けて午前一〇時半の列車でワルシャワ駅を発つことになった。¹⁶⁾そして到着駅では、帝室内省が差し向けた馬車が一行を待ち受けることになっていた。親王のための二頭二列の四頭立ての儀杖箱馬車「モルニ」、¹⁷⁾随員と侍従武官レイチェルンのための通常の軽馬車という編成であった。

儀典局から帝室宮内総局に宛てた露暦一八八九年四月二日(五月四日)付けの短信文書の中には、親王に同行するロシア側の代表者に、レイチェルンと並んで、海軍大佐エルチャニコフの名が記されている。

彼が任命されたのはおそらく儀式の性質上の配慮によるものと思われる。その後の新聞報道によれば、有栖川宮がアレクサンドル三世に謁見する際に日本海軍の制服を着用する意向であったとあり、儀式の参列者の中にロシア海軍の代表者も臨席させるといふのは論理的であった。同じ文書の中に、親王と随員がワルシャワ駅を発つ時刻が午前一〇時三〇分であることも明記されている。出発を手配する任に当たるのはレイチェルンで、そのことについては、露暦四月二日(五月四日)のシユ

チュルメル侍従の事務短信文書の中で彼に伝えられている。また、親王に同行するのは三等侍従官サイト【斉藤】、海軍大尉イヨシイ【吉井】、日本公使ニッシ【西徳二郎】¹⁸⁾がであることが記され、さらに、「親王と彼の同行者のために皇帝用馬車が用意された。親王の随員ならびに日本公使は、儀典局長と共に、別の馬車で行く予定である」と記されている。¹⁸⁾

ガツチナでの親王の出迎えを担当するのは、宮内三等侍従武官ウラジーミル・セルゲエヴィチ・オボレンスキーであった。それに伴い帝室内省儀典総局はオボレンスキーに、馬車の到着を知らせる先触れ二名、帝室宮内八等官二名、帝室宮内六等官一名の手配を要請した。¹⁹⁾

この書翰には印刷された名簿(二部)が添付されていて、親王の同行者として三等侍従官サイト【斉藤】、海軍大尉イヨシヤ【イヨシイ吉井】の二名の名が記されている。ただし、二部のうちの一部に鉛筆で日本公使ニッシ【西】の名が書き込まれている。²⁰⁾

これらすべての準備調整が行われていた二二日に、有栖川宮と随行者たちはレイチェルンの付き添いでペテルブルグの名所を見学し、ロシア帝国のイデオロギーを最も象徴する二つの首都施設、イサアク寺院とペトロバヴロフク寺院に足を運んだ。

訪問が予定されていた次の日、露暦一九八九年四月二三日(五月五日)は日曜日に当たり、そのこと自体が予定されている会見が半公式的な非公式なものと言ってもいい性質のものであることを物語っている。この二週間前にロシア正教徒は主たる教会祭日である復活祭を祝っていた。そして日曜日というのは、信者たちが教会での礼拝に訪れ、その時々に応じて聖体拝領の秘蹟を行う日である。このような日に極東の客を受け入れることが、皇帝アレクサンドル三世が親王を通常の実務的訪問者とは別待遇にしていることを示しているといえよう。

この演出は、両国皇室の友好に向けての、いわば招請と思われる。このような文脈は、国家的伝統を尊重する雰囲気の中で育った人間である有栖川宮にとつては謎めいたこととは思えなかつたはずである。特に、経験豊かな案内役であるレイチエルンあるいは、おそらくはシチエルバトフがそのことを有栖川宮に伝えたはずであると考えればなおさらである。ちなみに、シチエルバトフは、一時的には宮廷を離れていたが、アレクサンドル三世の信頼が厚かつた人物である。

行われた訪問の詳細については、一八八九年四月二五日（五月七日）に発行された公式な「新聞』『政府公報』『Правительственный вестник』のトップで報じられた。⁽²¹⁾

有栖川宮はガツチナに向けてワルシャワ線を一〇時に特別列車で出発した。同行者は、駐露日本公使西、三等侍従官齊藤、個人副官吉井海軍大尉、および、侍従武官レイチエルン、海軍大佐エルチャニノフであった。ワルシャワ駅で一行を見送つたのは、儀典局長で侍従のB・V・シユチュルメルである。

ガツチナでは宮内警備担当の侍従官ルコシコフが客人を出迎えた。

ガツチナ駅に到着した親王に用意されたのは、礼装の従僕と御者付きの二頭二列の四頭立ての儀杖箱馬車であった。有栖川宮は海軍の制服を着用し、日本天皇の勲章付きの綬をまといつていた。一行の馬車には先触れ二名、帝室宮内八等官二名、帝室宮内六等官一名が同行した。

ガツチナ宮殿に到着後日本使節団はアルセナリノエ・クラエ【Арсенальное капе 造兵工廠地区】を通じて、彼らのために用意された部屋に入り、侍従武官長O・B・リフテル、帝室式部長A・S・ドルブルーキー公爵、帝室宮内三等官V・S・オボレンスキー公爵が一行を迎えた。

この時間には宮殿教会での日曜日の礼拝も終わり、予定されていた接

見が正午に行われた。接見にはアレクサンドル三世の他に、皇后、皇太子ニコライ・アレクサンドロヴィチ【後のニコライ二世】が参列した。

ニコライ・ヤボンスキーの情報に従えば、親王は皇后マリヤ・フィードロヴナ【アレクサンドル三世の后】に日本天皇の冠の形の女性用勲章【宝冠章】を奉呈した。この勲章は日本皇后により設けられたものであるが、ロシアの聖エカテリーナ勲章にかなり類似したものであった。⁽²²⁾『政府公報』紙の説明によれば、日本のこの勲章は二つの星から成り、「一つは胸に付け、もう一つは、肩に掛けた赤い縁取りのある黄金色の飾り紐に付けるものである。星は真珠で飾られ、中央に桜の花と竹に囲まれた日本天皇の冠が描かれている」。

聖エカテリーナ勲章がピョートル大帝の后で後のエカチエリーナ一世によって制定されたもので、実際に高位の人物に授与されたステータスのある褒賞であったことをここで想起することは意味がある。^(iv)日本天皇の冠の勲章が制定された際に聖エカテリーナ勲章が見本としてどの程度参考にされたかどうかは不明であるが、『政府公報』紙の読者にとつて二つの勲章が似ていることは明らかであったはずで、天皇睦仁がすでに生前にしばしばピョートル大帝と並び称されたことを考えるとその可能性は高い。

有栖川宮親王のアレクサンドル三世訪問の公式的理由がロシアの専制君主の後に勲章を手渡すことであつたという事実は、ミカドの政府が「宮廷外交」の発展にも関心を持つていたことを間接的に示している。いずれにせよ明瞭なことは、この訪問が進むにつれ象徴的かつ儀礼的性質の演出に双方が特別な意味を付与していったことで、このことは、ロシアも日本も同じ程度に属すると言つてよい東方文化の国にとつては十分に伝統的なことである。

贈呈式に引き続いて行われた皇帝主催の午餐会の席で、両国にとつて

焦点となるであろう問題が、たとえ議論されなかったとしても、どの程度話題に上ったのかは推定し難い。午餐会で親王は皇后マリヤ・フョードロヴナの右手に座っていたことから、有栖川宮と皇帝との会話に彼女が加わったと考えることは当然のことであった。このような雰囲気の中で深刻なテーマを持ち出すことは当を得たものではなかった。多数の証人が臨席していることを考えればなおさらである。

午餐会にはロシアの高官数名の他に親王の同行者も臨席し、宮廷合唱団も出演した。

一三時三五分に親王はワルシャワ線の臨時列車でガッチナを立ってサント・ペテルブルグに向かった。このことから、有栖川宮と皇帝との私的な会談は、行われたとしても極めて短時間にすぎず、長くても一時間半を越えないものであったはずである。

同日の夕方、親王はマリンスキー劇場を、翌日はペテルブルグ大学を訪れた。『政府公報』紙が報じているところに従えば、親王の出発は金曜日すなわち露暦四月二十八日(五月一〇日)に予定されていた。有栖川宮はモスクワに向かい、そこから親王妃のヨスカ【慰子(やすこ)】のいるパリに戻るようになっていた。「親王の旅行は嚴重な忍びであったが、それは彼の公式使命がある間のみそれを解いていた」と『政府公報』紙は記し、読者の好奇心をそそっている²³⁾。

実際のところは親王の出発は元々露暦四月二十七日(五月九日)に予定されていた、ズイノヴィエフはペトロフに宛てた同日付けの書簡の中でそのことをモスクワ総督に知らせるよう要請している。日程の変更が生じたのはそれより前の二四日だったのであるが、そのことはどういおうかズイノヴィエフには知らされていなかった。「私、宮内総局長は謹んでニコライ・スチュエパノヴィチ閣下にお伝え申しあげます。侍従武官レイチェルン大佐の報告によれば、日本の親王有栖川宮威仁とその随員

のモスクワ出発は特急列車で木曜日に予定されていますが、親王がクロンシュタットを訪問する可能性があることから、金曜日に繰り下げられるかもしれません。なお、親王の公式使命はペテルブルグで終了するので、侍従武官レイチェルンは親王がモスクワに向けてサント・ペテルブルグを経った時点でその任務を終えるものとします。従いまして、モスクワでの親王のための部屋(七部屋)および随員と侍従のための部屋の準備、馬車三台の手配、モスクワでの出迎えについては、モスクワ宮内局から全権委託された人物が担当し、また、モスクワでの滞在費用の支出手続きについてもその人物に委託されることになると思われます。なお、陸軍大佐ゲレネットによれば、部屋の借り上げは金曜日と土曜日の二日間の予定とのことです²⁵⁾」。

西欧の軍事情勢の視察という面から言えば、クロンシュタットは有栖川宮親王の旅行のロシアにおける重要地点となったはずである。おそらく彼がバルチック艦隊の主要基地を訪れた最初の日本人であったことは間違いない²⁴⁾、しかもその日本人というのが、高位の人物で、主要な海軍大国の一員であるこの国の力を評価するに足る十分な職業上の知見の持ち主であった。そしてこの国は遠からぬ将来において日本の敵となるべき国であった。

親王のクロンシュタット訪問は予定通り行われたが、親王がそこで得た印象については日本の文書館を当たるべきことであろう。

一八八九年四月二十八日(五月一〇日)有栖川宮と随行者はモスクワに向かった。その三日前にペトロフは「第一の都」のヴラジーミル・アンドレエヴィチ・ドルゴルコフ総督に以下のことを伝えた。

「旅行は忍びで行われる予定です。親王はホテルに宿泊し、出迎は一切予定されていません。ただし、親王のモスクワ滞在中は、「第一の都」モスクワの名所見物について親王に説明するために英語の出来る人

間を付けることが望ましいと思われまます。

このことを閣下にお知らせすると同時に、部屋の借り上げについてはモスクワ宮内局に既に私からお伝えしたことを申し添えます⁽²⁶⁾。

一八八九年四月二六日(五月八日)付けの電報で、ペトロフに親王のために部屋(七部屋)がスラヴィヤンスキー・バザールに準備されたことが知らされた。モスクワの名所の案内人として特別に依頼された八等文官のシャハエフ公爵が日本人一行に付けられた⁽²⁸⁾。

これ以後親王の旅は忍びで続けられたので、帝室宮内省各当局の各文書館には親王の動向を反映したものはない。

その後の一種のエピソードとして指摘に値するのは、一八九一年に皇太子ニコライ・アレクサンドロヴィチ【後のニコライ二世】が日本を訪問した際に皇太子を出迎えたのが有栖川宮その人であったということである⁽²⁷⁾。奇妙な一致なのか、それとも偶然のことなのかは別として、長崎に停泊中の巡洋艦「パーミヤチ・アゾバ」【アゾフの記憶】号を皇太子が訪問したのは一八九一年四月二日(五月四日)、すなわち有栖川宮がガツチナを訪問してからちょうど二年後(一日足りないが)のことであった。

有栖川宮は大津で襲撃事件の際も皇太子の側にいた。この出来事目の撃者であるV・A・ヴァリヤチンスキーは、サンゾ・ツダ【津田三蔵】がサーベルで皇太子を傷つけた直後の様子を次のように記している。「ニコライ・アレクサンドロヴィチは通りの真ん中に立って、帽子はなく、血が激しく流れ出ている頭を右手で押さえていた。頭の右側の耳のかなり上の所に深い傷があるのが誰の目にも見えた。顔、首、両手は血だらけで、衣服もそうであった」。にも関わらず、軍務報告書の通りだとすれば、皇太子が真っ先に声を掛けたのは医師ではなく、「受け入れ側」の代表として皇太子に同行していた有栖川宮親王だった。「この出

来事が、日本各地で私になされた歓待の良き印象を損ねるのではないかなどとは一瞬たりとも思わないでほしい⁽²⁹⁾」。

有栖川宮は日本政府に、また私的にミカドに大津での出来事について報告したが、おそらくそれは、彼が事件について生々しく語った後のことであろう。

「天の息子」(天皇)は前例のない行動をとった。すなわち、歴史上初めて自らが外国の戦艦に乗り込んだのである。そして私的に皇太子に対して謝罪の言葉を尽くした。

以上述べたことすべてから、有栖川宮親王がロシアとより友好的な関係を望む側にいたと言えないだろうか。

言うまでもなく、地政学の分野を念頭に置いた場合、経済はその中で常に政治エリートの具体的代表者を繋ぐ私的關係に優越してきた。露日関係における経済という構成部分がより良きものを望むことを後回しにしていた以上、東京が対外的優先順位の設定と同盟相手国を模索する中でペテルブルグへの接近よりはロンドンとの同盟関係を最終的に選んだことは理に適っている。

この選択に相当な程度影響を与えたこととして、上記以外に、日本の国家体制が英国型のモデルに、すなわち専制体制から立憲君主制の方向に徐々に変化していったということがある。なお、この変換はペテルブルグでは直ぐには意識されなかった。その原因は情報不足というよりはむしろ、ステレオタイプが根付いていたことにある。すなわち、ロシアの政治家には、アジア的専制がヨーロッパ型の君主制、すなわちロシアに比して、さらにいっそう一貫してかつ急速に民主的自由を拡大する道を進んでいったことが信じ難いことだったのである。

総じて認めなければならないのは、日本がロシアを置いてイギリスに接近していったのは合法的であり、私的接触が全体的な進行過程を変

えることはおよそ不可能であったということである。

一八八九年の有栖川宮親王のペテルブルグ訪問そのものをもし評価するとすれば、双方は互いに満足したと言うことは出来る。

両国の皇室代表者の私的交際は非公式的雰囲気の中で行われ、負担の少ない心地よい儀式を伴ったもので、以後の非公式接触に向けての有効な基盤を作り出した。現実の出来事が順調に進んでいる場合には、このような「宮廷外交」が公式外交にとっての独特な担保となりえたはずである。というのも、公式外交はしばしば複雑な問題に遭遇し、双方の帝国の外交路線を決定する人物の間での一定の個人的好感が存在している場合のみその解決が可能であったからである。

しかしながら基本的なことは、重要な外交問題の解決が舞台裏での討議の後に君主の独力で図られるという時代はすでに過去のものになりつつあったということである。君主間の私的関係とは別に、「宮廷外交」は去りゆく一九世紀と共に歴史の一部となっていくた。

(翻訳：有泉和子)

- 〔注〕
- (1) РГИА, Ф.473, Оп. 1, Д. 2059, лл. 6 и 6 об.
 - (2) Там же, лл. 13-14.
 - (3) Александр Михайлович Воспоминания // militera. lib. ru/memo/russian-a-m/07.html.
 - (4) Дневники Николая Японского. Т. 2 – СПб., 2004 г., с. 314.
 - (5) РГИА, Ф.468, Оп. 42, Д. 904, л. 1.
 - (6) Там же, л. 2.
 - (7) Там же, л. 3.
 - (8) Там же, л. 4.
 - (9) Там же, л. 6.

- (10) Там же, л. 7.
- (11) РГИА, Ф.473, Оп. 2, Д. 102, л. 13.
- (12) РГИА, Ф.468, Оп. 42, Д. 904, л. 8.
- (13) Там же, л. 9.
- (14) Ф.473, Оп. 2, Д. 102, л. 14.
- (15) Там же, л. 8.
- (16) Там же, л. с 9 с об.
- (17) Там же, л. 3.
- (18) Там же, л. 11.
- (19) Там же, л. 5.
- (20) Там же, лл. 9-10.
- (21) РГИА, Ф.468, Оп. 42, Д. 904, л. 18.
- (22) Там же.
- (23) Там же.
- (24) Там же, л. 11.
- (25) Там же, л. 12.
- (26) Там же, л. 13.
- (27) Там же, л. 13.
- (28) Там же, л. 15.
- (29) Цит. по Ухтомский Э. Э. После злодейского покушения с. 17 // Путешествие на Восток Еро Императорского Высочества наследника Цесаревича. Т. 3 - СПб., 1897 г.

〔訳者注〕

- (i) 謁見に関しては、『明治天皇紀』第二「明治五年十月十七日、十八日条」及び、中村喜和、トマス・ライマー編『ロシア文化と日本 明治大正期の文化交流』彩流社、カバー絵参照。
- (ii) 『明治天皇紀』第六「明治二十年七月五日〜九日条」参照。
- (iii) 『明治二十一年勅令第一号(宝冠章及大勲位菊花章頸飾ニ関スル件)』

参照。

(iv) 「ロシアNOW」二〇一二年二月七日付「ピョートル一世が妻のために聖エカテリーナ勲章を創設」毎日新聞社。

(v) 中村喜和「ロシア公使時代の榎本武揚の宅状」『ロシアの木霊』（風行社、二〇〇五年）二二三～二三九頁参照。

(vi) 有栖川宮熾仁『熾仁親王日記』（東京大学出版会、一九七六年）巻五、『熾仁親王行実』（高松宮家、一九三八年）明治二十四年五月十一日条以下、『熾仁親王行実』（高松宮家、一九二六年）巻上二二六頁以下参照。

本研究集会は、科学研究費補助金基盤研究A「ロシア・中国を中心とする在外日本関係史料の調査・分析と研究資源化の研究」（課題番号二三二四二〇三九、研究代表者：保谷徹）の一環として、その経費の一部も使用して行なった。